

長野の酒メッセ in東京2011

NAGANO no SAKE MESSE in Tokyo

55歳の銘酒、総結集！
震災被害を乗り越えて、待望の試飲イベント



信州の日本酒を一堂に集めた「長野の酒メッセ in 東京 2011」が、7月6日の午後1時～8時まで、港区高輪のグランドプリンスホテル高輪で開催され、流通・料飲関係者や一般の日本酒ファンなど、およそ1300人の来場者が「信州地酒の世界」を堪能しました。大震災の影響を乗り越えて開催にこぎつけた試飲イベントの様子をレポート。

開催を実現した蔵元、日本酒ファン双方の熱い思い

手頃な参加費(1人2500円)で信州の地酒を徹底試飲できるというシンプルな企画が受けて、首都圏の流通・料飲関係者や日本酒ファンから絶大な支持を集めている「長野の酒メッセ in 東京」。例年5月に開催されてきたこのイベントが今回7月にずれ込んだのは、東日本大震災とその翌日(3月12日)に起きた長野県北部地震の影響を受けたためです。



「今年も5月に開く予定で準備を進めていたが、地震のせいで一旦中止を決定した。再度、開催することになったのは、長野の酒を元気づけたいという我々の気持ちと、多くのファンから『こういう時こそやってくれ』という後押しがあったから」(広報宣伝委員長の宮坂恒太郎氏)。今回のイベントは日本酒復興を願う蔵元、ファン双方の熱い思いで実現したものといえそうです。

信州地酒の多彩な味わいを PR

「長野の酒メッセ in 東京」の開催は今年で 8 回目。今回は、県内の 55 蔵が計 500 点以上の自慢の酒を持ち寄って信州地酒の多彩な味わいを PR しましたが、前回同様、和服着用の来場者には入場料の割引(500 円)、また先着 600 名には日本酒プレゼントといったサービス企画もあって、会場には、あでやかな着物姿の女性など多勢の来場者が詰め掛け、出品リストをチェックしながら、熱心な試飲風景を繰り広げました。



東日本大震災被災蔵への募金活動も

各蔵のブースでは揃いの法被をまとった蔵元関係者らが、来場者との日本酒談義や最新情報の交換に大忙し。試飲の合い間に「やわらぎ水」を口にする来場者も多く、「酒ときどき水」のスタイルも着実に普及してきた様子。また、入口受付には東日本大震災で被災した蔵元のための義援金箱が設置され、被害の状況を尋ねながら募金に応じる来場者の姿も見られました。



原産地呼称認定純米酒 33 点を紹介

このほか、蔵元の出展ブースとは別に設けられた長野県原産地呼称管理制度(NAC)の認定純米酒試飲コーナーでは、去年の認定酒 168 点の中から 33 点を紹介。応接した県の担当者は、「NAC に対する認知も次第に広がっている。今年は地震の被害もあって、長野の酒にも県内外から応援が集っているが、そういう励ましに答えるためにも信頼度の高い制度に育てていきたい」と語っていました。



信州地酒のミニセミナーや「信州 SAKE カントリーツーリズム」の紹介も

会場正面に設けられたステージでは、(社)長野県食品工業協会の榛葉芳夫氏によるミニセミナー(「信州の自然にいとむ日本酒造り」)や、県組合が昨年から取り組んでいる「信州 SAKE カントリーツーリズム」の紹介(講師は田中隆一 広告宣伝委員)が行われました。



榛葉氏の話は、四季折々の多彩な自然の中から生み出される信州地酒の特徴をわかりやすく解説したもの。また、「信州 SAKE カントリーツーリズム」は、長野県内を旅して所定の酒蔵(参加 76 蔵)で買い物をした際にもらえるスタンプを集めると、個数によって様々な日本酒がもらえるというもので、いずれも熱心な日本酒ファンの関心を集めました。

セミナーの様様(顔写真上は榛葉氏、下が田中委員)